

# こどものじかん こども だった じかん

子どもは未熟な存在？ 大人のミニチュア？ いいえ、子どもは大人と全く違う生き物とも言われます。その秘密を探るべく本を集めてみました。

また、子ども時代は、誰もが必ず通り過ぎるもの。ちょっと「過去の自分」を振り返ってみませんか。

## ●赤ちゃん、ふしぎふしぎ●

『赤ちゃんに学ぶ「個性」はどこから来たのか』 山口真美／著 講談社

赤ちゃんの知覚や認知を探るための実験室を、20年以上運営してきた著者による、赤ちゃんの発達から個性の成り立ちを考える本。赤ちゃんを取り巻く環境も考えます。

『日曜ピアジェ 赤ちゃん学のすすめ』 関一夫／著 岩波書店

誕生から2歳くらいまでの乳幼児を対象に、読者自らが実験を行い、「心のメカニズム」を考えるための本です。赤ちゃんに向けて舌を出すと模倣するかなど、身近に行えるものがたくさんあります。

『赤ちゃんの心はどのように育つのか』 今福理博／著 ミネルヴァ書房

『なるほど！ 赤ちゃん学』 玉川大学赤ちゃんラボ／編 新潮社

『赤ちゃん』 成長の不思議な道のり 安川美杉／著 日本放送出版協会

『赤ちゃんは顔をよむ』 山口真美／著 角川学芸出版

『ジャスト・ベイビー』 赤ちゃんが教えてくれる善悪の起源

ポール・ブルーム／著 竹田円／訳 NTT 出版

そもそも、生まれる前って？

『あなたが生まれてくるまでの話』

カタリーナ・ヴェストレ／著 安田容子／訳 河出書房新社

『双子の遺伝子』 ティム・スペクター／著 野中香方子／訳

ダイヤモンド社



## ●子どもの気持ち、のぞいてみると……●

『おえかきウォッチング』子どもの絵を10倍たのしむ方法

なかがわちひろ／著 理論社

児童文学作家でもある、なかがわちひろさんによる子どもの絵についてのお話です。子どもたちが描いた実際の絵を見ながら、成長に寄り添い、子どもの視点を大事に楽しく語られています。

『子どもの絵はなぜ面白いか』 安斎千鶴子／著 講談社

『創造的人間形成のために』 鬼丸吉弘／著 勁草書房

『ちいさい言語学者の冒険』 広瀬友紀／著 岩波書店

大人になるとわからなくなる「ことばを身につけた過程」を、子どものことばの使い方を例にとって紹介していく本です。ことばを身につける最中の子どもたちの珍プレーから、その秘密を探ります。

『ことばの発達の謎を解く』 今井むつみ／著 筑摩書房

『おひさまのかけら』『こどもの詩』20年の精選集 川崎洋／編

中央公論新社

読売新聞「こどもの詩」に1982年1月から2001年12月に掲載された中から選ばれたものです。作者は幼児から中学3年生まで。子どもの感性に、思わずハッとさせられます。

『子供力！』詩を書くキッズ 増田修治と子どもたち／著 弓立社

『子どもはみんな問題児。』 中川李枝子／著 新潮社

『ぐりとぐら』の作者である中川李枝子さんは、17年間保育士として子どもと関わってきました。その時のできごとを中心に、子どもの本質を見つめ、あたたかく見守る様子がえがかれています。

『子どもへのまなざし』（続、完もあります） 佐々木正美／著 福音館書店

『孫の力』 島泰三／著 中央公論新社

『大人が知らない子どもの体の不思議』

榊原洋一／著 講談社

『子どもはなぜ嘘をつくのか』

ポール・エクマン／著 菅靖彦／訳 河出書房新社



## ●新鮮？ 懐かしい？ 昭和の暮らしと子どもたち●

『昭和こども図鑑』 奥成達／文 ながたはるみ／絵 ポプラ社

『チビッコ三面記事』 子どもの事件簿 串間努／著 筑摩書房

かわいいタイトルとは裏腹に、なかなか怖い事件が満載です。

『たのしかった日日と さようならと』 乳児院の子どもたち (写真集)

石亀泰郎／著 文人社

写真絵本『イエペはぼうしがだいすき』（文化出版局）など、子どもをテーマにした写真を多く撮影している石亀泰郎さんは、乳児院の子どもたちの様子を取材した本も出しています。保育士や友だちと生き生きと遊ぶ子どもたちですが、その背景はさまざまです。1979年の出版ですが、社会的養護を必要とする子どもは、今なお多く存在します。同著者の乳児院をテーマにした作品には、『コリャオンドリャなに泣くか』（文人社）、『かあさんのにおい』（広済堂出版）などもあります。

『子どもたちの日々』 (写真集) 飯沢耕太郎／編 福音館書店

『ぼくらの分校』 (写真集) 大野ひろゆき／著 邑心文庫

『子どもの領分』 (写真集) 園部澄／著 林えり子／文 淡交社

『街にあふれた子どもの遊び』 (写真集) 萩野矢慶記／写真・文 彩流社

## ●児童文学者の視点から見た子ども●

『幼い子の文学』 瀬田貞二／著 中央公論新社

『三びきのやぎのがらがらどん』（福音館書店）や「ナルニア国ものがたり」シリーズ（岩波書店）の翻訳などでも知られる瀬田貞二さんは、旧浦和市の自宅で家庭文庫を開くなど、市ゆかりの児童文学者です。今年で没後40年を迎えますが、氏が残した児童文学の評論集は、今でも子どもの本に携わる人たちの道標となっています。この本は、その入門書的な講話集です。

『かんがえる子ども』 安野光雅／著 福音館書店

『未来のだるまちゃんへ』 かこさとし／著 文藝春秋

『えほんのせかいこどものせかい』 松岡享子／著 日本インターナショナル出版部

『本・子ども・絵本』 新版 中川李枝子／著 山脇百合子／絵 大和書房



『子どもの育ちを支える絵本』 協明子／編著 岩波書店

『心に緑の種をまく』 渡辺茂男／著 新潮社

『石井桃子のことば』 中川李枝子・松居直・松岡享子・若菜晃子／著  
新潮社

旧浦和市出身の石井桃子さんは、現在の日本児童文学の礎を築いたひとりです。『クマのプーさん』（岩波書店）、「うさこちゃん」シリーズ、「ピーターラビット」シリーズ（共に福音館書店）の翻訳などのほか、絵本や評論集も執筆しました。この本では、ゆかりの写真と共に、氏の残した「ことば」が採録されています。子どもに対する真摯なことばの数々は、大人にこそ響いてほしいと思える1冊です。



こんな本もあります

### ●歴史からひもとく、子どもと子育ての風景●

『浮世絵に見る江戸の子どもたち』 くもん子ども研究所／編著 小学館

『江戸の躰と子育て』 中江克己／著 祥伝社

『江戸の親子』 太田素子／著 吉川弘文館

『武家の女性』 山川菊栄／著 岩波書店

『平安朝の父と子』 服藤早苗／著 中央公論新社



ここに紹介した他にも、たくさんの本をご用意しました。  
貸出中のものは、ご予約もできます。  
お気軽にお声がけください。

令和元年 10 月  
編集・発行  さいたま市立桜図書館  
さいたま市桜区道場4-3-1  
電話 048-858-9090  
FAX 048-858-9091  
<https://www.lib.city.saitama.jp/>

